

# 新作日本画30点を掛け軸に仕立て

## 若手表具師と美大生 紡ぐミライ

江戸表具の若手職人たちが首都圏の美術大学生らと組み、新作の日本画を引き立てる掛け軸に仕立てた作品展「掛け軸と絵画のミライ展」が十九日から、東京都中央区八重洲の田中八重洲画廊で開かれる。

(野呂法夫)

### 都内で19日から作品展

昭和の時代、掛け軸を床の間にかけて、書画を楽しむ家庭が多かった。だが住宅に和室が減る中で掛け軸文化は衰退し、日本画家も作品を額やパネルに収めて表現することが増えた。

この流れに危機感を抱くのが、江戸表具の研究会「表具会」(東京)だ。日本が誇る掛け軸や屏風、襖を作る技法や知識を継承するためにも、「床の間を離れ、洋間や現代の空間に飾る新しい軸絵の未来を切り開こう」(幹事長・石塚利郎さん)と、会の設立二十

ミライ展で発表する掛け軸を掲げる美大生と表具師  
—東京都千代田区で



美術系大学に呼びかけたところ、東京造形大や女子美大、横浜美大など六つの大学の学生や助手、教授計三十人が参加した。額絵と異なり、軸絵は巻くことから、学生らは薄く

柔軟な作品になるよう試みて制作。表具師たちは手すき和紙や正麩のりなどを使い、その絵の感性をより引き立てる掛け軸として計三十点を完成させた。作品「ある夏の日のなつ

## 「描いた絵の物語性が深まった」

かしき」は、金魚二匹がプ  
リキのじょうろの周りで泳  
ぐ朱鮮やかな絵を、和の風  
景のイメージで仕立てた。  
「描いた絵の物語性が深  
まった」と多摩美大大学院  
二年の片野莉乃さん(二)が  
話せば、表具師の野口麻里  
子さん(四)は「普段は古書  
画を扱うが、現代作家の作  
品に取り組み、いい経験で  
した」と笑顔を交わす。

東京芸大大学院一年、齋藤愛未さん(二)は福島県喜多方市の新宮熊野神社・長床から見た黄葉の大銀杏、多摩美大三年、尾崎菜花さん(三)は現代風女性の人物画をそれぞれ描いた。二人とも「軸絵にしていたとき、絵の可能性が広がった」などと感想を述べた。

会の代表で、江戸末期の天保年間創業「経新堂稲崎」の稲崎昌仁さん(四)は「東京都中央区」は「画家と表具師の感性が融合してすばらしい作品が出来上がった。掛け軸の良さを見直していただけ」と話す。

入場無料、二十四日まで。問い合わせは石塚さん  
電話090(7170)7135へ。